

## 2009年8月2日 主日礼拝メッセージ

聖書箇所：サムエル記第一 6章 13～21節

説教題：だれが聖なる神の前に立ちえよう

2015年8月9日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記 14章 12～24節

説教：このはしためをきつと助け出してくださる

あらすじ

パウロは、「キリストが復活されなかったのなら、私たちの宣教と信仰は中身の無い空っぽなものとなる」(第一コリント 15章 14節)と言いました。新約聖書を開けば、あらゆるところにキリストの復活のことが記されています。旧約ではどうでしょうか。あまり印象にないというのが多くの方の感想でしょう。実は今日開いている箇所でそのテーマが扱われています。これから見て参ります。

あらすじをふり返ります。ダビデの長男アムノンは、悪い友人にそそのかされ血のつながっている妹タマルをはずかしめました。同じ兄弟で三男のアブシャロムは、このことを聞きアムノンを殺し、その後母親の実家に逃げていきます。

王の一族の間で兄弟どうしの殺人事件が起きたのですから、国中は大騒ぎです。ところがダビデは何もしないまま三年が過ぎてしまいました。どうして何もしないのか。ダビデの心がうずくので、何もできないのです。話は、数十年前の夏にさかのぼります。屋上を散歩していた時、偶然にバテ・シェバの裸を見てしまいます。すぐに彼女を呼び寄せ、一夜をともにし、妊娠させてしまいます。そ

うなると邪魔なのはバテ・シェバの夫のウリヤです。ウリヤを戦場に送り、合法的に殺してしまう。そうやって、バテ・シェバを自分の妻としてしまいました。アムノンとアブシャロム、このふたりの息子たちは自分の父親がかつて犯した罪をそのままくり返しているのです。それがダビデにわかる。だから何もできず、三年の間膠着状態が続いていきました。

これを心配したのが、ダビデの側近ヨアブです。事態を打開するためにテコアという町からひとりの女を呼び、ダビデの前で一芝居打たせることにしました。どんな芝居か。女にこう言わせるのです。自分は夫を亡くしたやもめで、ふたりの息子がいた。ある日、息子たちがけんかをしてひとりが相手を殺してしまった。親族がこれを聞きつけ、兄弟を殺した者は殺すべきであると言って騒いでいます。このままでは、私は夫を亡くした上に残されたひとりの息子まで失うことになる。どうか王さまから命令を出してもらい、殺されずに済むようにして欲しい。ダビデはこの訴えを聞き、すぐに言いました。「あなたの息子の髪の毛の一本も決して地に落ちることはない。」つまり、あなたの息子は兄弟を殺したかもしれないけれど、救われるのだ、という判決です。これが前回まであらすじでした。

- 1 いのちをかけて訴えるテコアの女
- 1) 王は追放された者を戻していない

判決が出たのですからこれで終わりのはずですが、本題はここから始まります。女はダビデにこのように申し上げます。13 節。「あなたはどうして、このような神の民に逆らうようなことを、計られたのですか。王は、先のようなことを語られて、ご自分を罪ある者とされています。王は追放された者を戻しておられません。」

「王は、このようなことを語られて、ご自分を罪ある者とされています。」このことは、少し説明が必要です。ダビデは女に向かってはっきりと宣言をしました。あなたの息子は兄弟を殺し罪を犯したけれど、救われなければならない。このことばそのままダビデに跳ね返ってきます。ダビデの息子アブシャロムは兄を殺しました。母親の実家に逃げ込んで三年が経っています。ダビデはその間、何もしません。王は追放された者を戻していない。自分が今言ったことと、実際にしていること、矛盾しているのではないか。人々はイスラエルの王がどんな事を語り、どのような行動をするか注目しています。言っている事とやっていることが正反対ならば、人々は、正義はどこに行ったのかと怒ります。そうやってダビデは神の民に逆らうようなことをしている、と女はずばりとダビデに申し上げのでした。

2) もしそのままなら、神は死んだ者をよみがえらせないことになる

それはよいとして、不思議なのはなぜここまでこの問題にこだわるのかということです。冷めた言い方をするなら、ダビデはいままでのように、アブシャロムが逃げたままにしてあえてこの問題に触れないようにするという選択肢もあり得るのです。世の中は矛

盾だらけです。あちらを立てればこちらが立たない、そういうことが沢山あります。なので難しい問題にはあえて触れないで置く。世界の政治はそんな原理で動いています。テコアの女を連れて来てすべてを計画したヨアブは政治のプロですから、当然この原理を知っています。そのヨアブがこの問題にこだわり、わざわざ女を連れて来て芝居を打たせるのはなぜか。理由があるはずで

そのことは14節に集約されています。「私たちは、必ず死ぬ者です。私たちは地面にこぼれて、もう集めることのできない水のようなものです。神は死んだ者をよみがえらせてはくたさしません。どうか追放されているものを追放されたままにしておかないように、ご計画をお立てください。」

ここを読んで、「おや？」と思った方がいるかもしれません。「神は死んだ者をよみがえらせてはくたさしません。」主イエスは死からよみがえられた。神は死んだ者をよみがえらせてくださる。これが私たちの信仰の核心です。テコアの女は、よみがえりの信仰はもっていなかったのか。私は最初そう思いました。

そうではない、逆です。神は死んだ者をよみがえらせてくださる。ヨアブもテコアの女もこの一点にこだわっています。絶対にこのことは揺るがされてはならない。そのためにはいのちをかけて一芝居を打ち、ダビデの心を動かさなければならぬ。それほどの大きな問題だと考えているのです。

では14節のことばはどういうことなのか。まず13節の最後のことばに注目してください。「王は追放された者を戻しておられません。」そして今度は14節の最後のことばを見ます。「どうか追放されている者を追放され

たままにしておかないように（してください）。」14 節全体は、この二つのことばにはさまれています。そういう語り方です。つまりこういうことです。ダビデが息子のアブシャロムを追放しままで何もしなければどんな結末になるのか。私たちは死んでしまうだけ。日本語にある「覆水盆に返らず」ということわざのとおり、死んだ者は生き返らない。ダビデが追放した者を戻さないなら、神は死んだ者をよみがえらせてくださらないと、ダビデがイスラエルに宣言することになる。それは神の真理ではない。絶対にそんなことがあってはならない。そう訴えているのです。表向きはダビデ家のどろどろしたスキャンダルでした。ところがこの事件を通して死者の復活という大切な問題が取り扱われています。

### 3) 「わが主、王」

女は16 節で、「王さまは聞き入れて、私とわたしの子を神のゆずりの地から根絶やしにしようとする者の手から、このはしためをきつと助け出してください」と訴えます。いったい誰に訴えたのでしょう。聖書を見ると、テコアの女が「王さま」と呼びかけているところに、米印がついているのに気がつくでしょう。あとで皆さん数えてみてください。9 節から 20 節まで米印がついている「王さま」という呼びかけが七回くり返されています。これは偶然ではなく、特別な呼びかけなのです。下の欄を見ると、『直訳「わが主、王」』と書かれています。「わが主、王」とはもちろんダビデのことだと思うでしょう。間違いではありません。でも、テコアの女の立場を考えてください。自分は今、ダビデの前で芝居をしています。一步間違えば首

が飛ぶ話です。いのちがかかっています。たとえいのちを失うことがあっても、訴えなければならぬと迫られています。女が見ているのはダビデではありません。ダビデの向こう側に立っておられる主を見上げているようです。それが「わが主、王」という呼びかけに現れています。

## 2 兄を殺した者であっても戻される

### 1) 不公平ではないのか

テコアの女は最初自分の息子のことをダビデに訴えましたが、ダビデが判決を下した途端にアブシャロムのことを持ち出してきます。ダビデはそこでようやく女の話が作り話であることに気がつきます。けれども、怒る訳にはいきません。女は正しいことを言っているのです。ヨアブに命じてアブシャロムを連れ戻すことを決断します。女の願いは聞き届けられました。

しかし、最後に一つだけ問題が残ります。どんな理由であれアブシャロムはダビデの世継ぎアムノンを殺したのですから、それなりの罰を受けるべきです。それが何のおとがめもなしで、エルサレムの自分の家に戻ることに許された。それでいいのでしょうか。

民数記に「殺人者は必ず殺されなければならない」とあるのです。ダビデがどんなことを言ったとしても民数記の律法は有効です。人を殺した罪はどうなるのでしょうか。ダビデは間違ったことを言ったのか。いいえ。正しいことを言いました。では民数記の律法はどうなるのでしょうか。罪は水に流されたということか。そんなことはありません。罪は残っています。

### 2) 主がさばきを受けられる

アブシャロムが罰せられないというのなら、だれかが身代わりとなる必要があります。おわかりのとおり、主が代わりに殺されていきます。

ここに書かれていることはアブシャロムひとりの話ではありません。私たちのことが書かれています。主の目から見ると私たち全員は人を殺した罪人です。どんな理由であれ、殺人者は殺されなければならない、そう言われていた者です。ところがダビデが、「あなたの息子の髪の毛の一本の決して地に落ちることはない」と言ったひとことで、私たちは救われました。たとえ人を殺して追放された者であっても、主は元の場所に戻して下さい。殺されるようなことがあっては絶対にならない。ダビデはアブシャロムをエルサレムに戻します。私たちもかつて津法によって殺されなければならないと言われていたものだけれど、必ず神の都エルサレムに戻して下さい、神のそばに住むことができる。

この約束は絶対に覆されてはなりません。どんなことがあっても守り通される必要がある。テコアの女がいのちをかけて、王であるダビデの前で芝居を打っていきます。女が真剣に訴えれば訴えるほど、この約束がいかにか私たちに大切なものであったのかが浮き上がってきます。テコアの女の姿を通して、神がどんなことをしてもこの約束を果たそうとしている、神の思いが伝わって参ります。

追放された者は、元のところに戻されなければならない。この約束によって私たちはいま救われていることを覚えます。